令和２年８月27日（木曜日）

建設通信新聞

連携して浸水被害を低減

20年７月豪雨 日田市被災地　足立議員が松原、下筌ダムなど視察

九州地方を始めとする日本各地に甚大な被害をもたらした２０２０年７月豪雨の際、大分県日田市の松原、下筌両ダムが下流地域の水害被害の低減に大きな効果を発揮した。11日に両ダムなどを視察した自民党の足立敏之参院議員は、「２つのダムが連携して洪水調節能力を発揮して下流を守った。ダムの効果があった証だ」と説明した。

20年７月豪雨によって、ダム上流域では７月６日５時から８日８時までに６２８・１ミリの累加雨量を観測し、両ダムともに６日夕方から防災操作を開始。上流側にある下筌ダムは満杯になり、異常洪水時防災操作に移行したが、下流側の松原ダムがそれを受け止める形で、下流の水位の急上昇を防いだ。国土交通省によると、両ダムが整備されていなければ、下流の水位が約１・２メートル上昇し、計画高水位を超過していたと推定している。

松原ダムは堤高82メートルの重力式コンクリートダム、下筌ダムは堤高98メートルのアーチ式コンクリートダム。両ダムは１９５３年の筑後川の大水害を契機に計画され、73年に完成しているが、58年からいわゆる「蜂の巣城紛争」と呼ばれる大規模な反対運動が展開されたことで知られている。

足立議員は、今回の豪雨で被災した杖立温泉も視察。「新型コロナウイルスの影響でダメージを受けている温泉街を、どう再生させていくのか大きな課題だと感じた」と振り返っている。

視察する足立議員（右から２人目）